（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第20集）

旦椋遺跡

第２次発掘調査概報

1993

宇治市教育委員会

序

宇治市教育委員会では、昭和62年度から文化庁より国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府より文化財緊急保存費補助金の交付を受け、市内に存在する重要な遺跡や緊急に保護しなければならない遺跡に対して、計画的に発掘調査を実施しております。

平成４年度は、平成３年度の発掘調査で新たに発見された旦椋遺跡の発掘調査を実施しました。旦椋遺跡は古墳時代から奈良時代の複合遺跡で、「和名抄」に名前の見える栗隈郷と関連の深い遺跡であることが予想されています。今回の発掘調査は、この旦椋遺跡の範囲確認を目的として行いました。

本書はこの発掘調査成果をまとめたものです。本書が多くの方々の目に触れ、広く宇治の歴史を知る機会となり、文化財保護に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた土地所有者の方をはじめ、調査にあたりご指導を賜った関係機関並びに各位、そして調査に参加していただいた方々に対して心よりお礼を申し上げます。

平成５年３月

宇治市教育委員会
教育長　岩　本　昭　造

目　　次

1．はじめに ……2
2．地理的・歴史的環境と第１次調査 ……3
3．遺　　構 ……7
4．遺　　物 ……13
5．ま と め ……16

例　　言

1、本書は、平成４年度宇治市内遺跡発掘調査事業として実施した調査の概要報告書である。

2、本書が収録する遺跡の所在地は、京都府宇治市大久保町北ノ山109-1である。

3、本事業の経費は、文化庁より国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府より文化財緊急保存費補助金を得た。

4、本発掘調査事業の組織は下記の通りである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
調査担当者	同	社会教育課　主事	杉本　宏
	同	社会教育課　主事	荒川　史
調査事務局	同	参　事	頼成綾子
	同	社会教育課　課長	池田正彦
	同	社会教育課　文化係長	吉水利明
	同	社会教育課　主任	山本敦子

5、本発掘調査事業実施に当たって、下記の機関・各位にご指導を賜った。

京都府教育庁指導部文化財保護課、京都府立山城郷土資料館、杉原和雄（京都府教育庁指導部文化財保護課課長補佐）、中谷雅治（京都府埋蔵文化財調査研究センター次長）、高橋美久二（京都府立山城郷土資料館館長補佐）、橋本清一（京都府立山城郷土資料館調査員）〔順不同・敬称略〕

6、本発掘事業の参加者は下記の通りである。

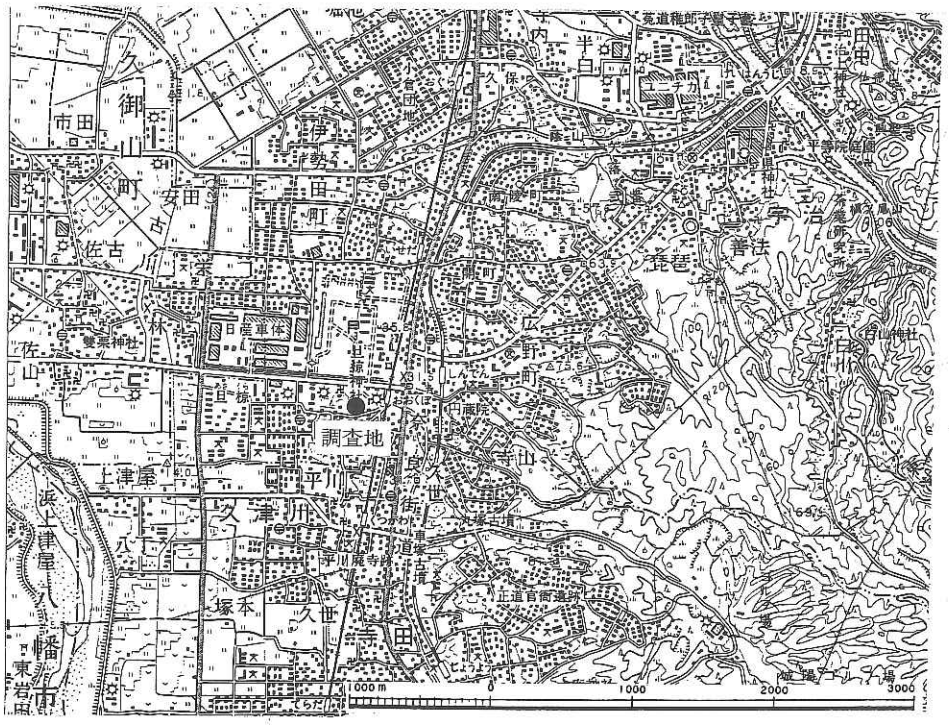
今西礼子・久保千恵子・志村みどり・浜中邦弘・福島孝行・宮川千代実・今井聡子

7、本書の編集は社会教育課が行い、編集実務および執筆を荒川が行った。

1．はじめに

旦椋遺跡は、平成３年度に行った宇治市営旦椋団地の建替えに伴なう発掘調査によって、新たに発見された遺跡である。この調査では、６世紀後半の古墳や７～８世紀の集落遺構を検出し、さらに大量の遺物が出土していることから、大久保町周辺における拠点的な集落であることが予想された。大久保町周辺は、文献では古墳時代以来久世郡で勢力を持っていた栗隈氏と関連の深い栗隈郷と推定されており、この意味からも遺跡の重要性が認識された。ところが、この地域は近鉄大久保駅から至近の距離にあることから開発が早く、わずかに大久保環境濠集落遺跡が知られるのみであった。このため早急に遺跡の範囲を確認し、近年進みつつある周辺の再開発に備える必要が生じてきた。そこで旦椋神社の協力を得て、遺跡の範囲確認調査を行うこととなったのである。

調査は、平成４年11月18日から平成５年１月23日まで行い、調査面積は約 165 ㎡である。調査期間中宗教法人旦椋神社並びに総代北村円太郎氏・安岡博文氏の全面的な協力を得た。記して謝意を表する。

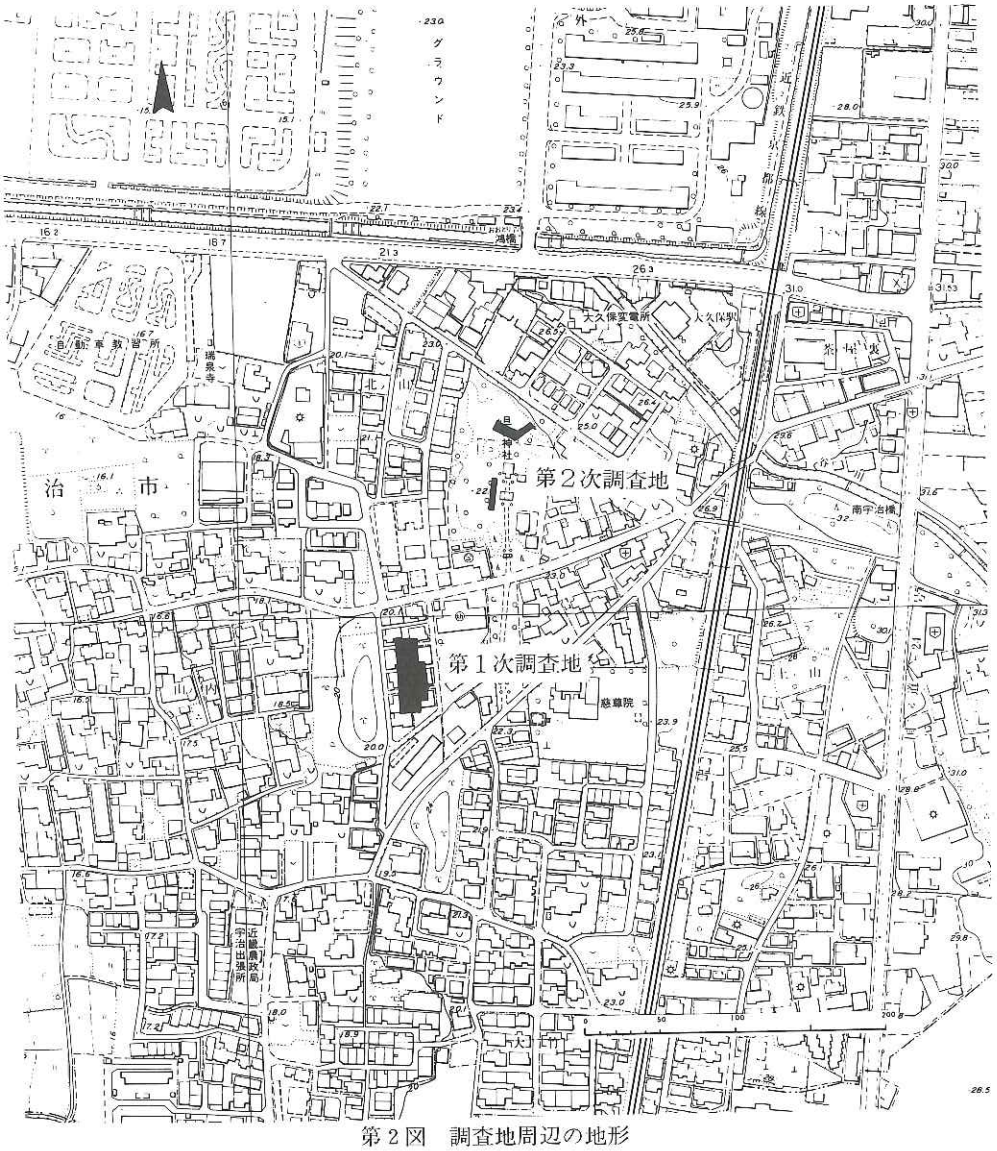


第１図　調査地位置図

2．地理的・歴史的環境と第１次調査

A．地理的・歴史的環境

宇治市の南西部に位置する大久保町は、東に宇治丘陵と呼ばれる主に砂礫層からなる丘陵を配し、西には木津川が形成する低湿地を配する。宇治丘陵を開析する河川は、ほとんどが小規模のものであるが、大量の砂礫を押し出し、低位段丘の大久保周辺で扇状地を形成して



第２図　調査地周辺の地形

いる。調査地周辺の扇状地を形成しているのは、調査地の北東で合流する名木川と大谷川であろうが、地形的に不自然な流路をとっており、人為的な付け替えが行われていることが考えられている。このため古代における地形の復元が、現地形からは非常に困難な状況になっている。

宇治市西部において、低位段丘上から沖積地にかけて立地する遺跡はあまり知られていない。わずかに巨椋池のほとりに位置する小倉・伊勢田地区において、断片的に弥生時代の遺構が知られているのみである。調査地周辺の大久保地区では、近鉄大久保駅周辺に何基かの古墳があったことが伝えられているが、すでに破壊され具体的な内容は不明である。

今回の調査地である旦椋神社は、『延喜式』に記載された式内社で、旦椋の名称が校倉から転訛したものと考えられることから、文献からは大久保周辺が『和名抄』にその名の見える栗隈郷と推定されている。しかし地元の伝承では、旦椋神社は調査地の西方の大久保町旦椋にあったものが現在の地に移ったとされており、旧社地とされる盛土も残っていた。昭和48年、府営西大久保団地の建設にともない発掘調査が行われ、小さな社の存在は推測されたが、旦椋神社旧社地との確証は得られなかった。

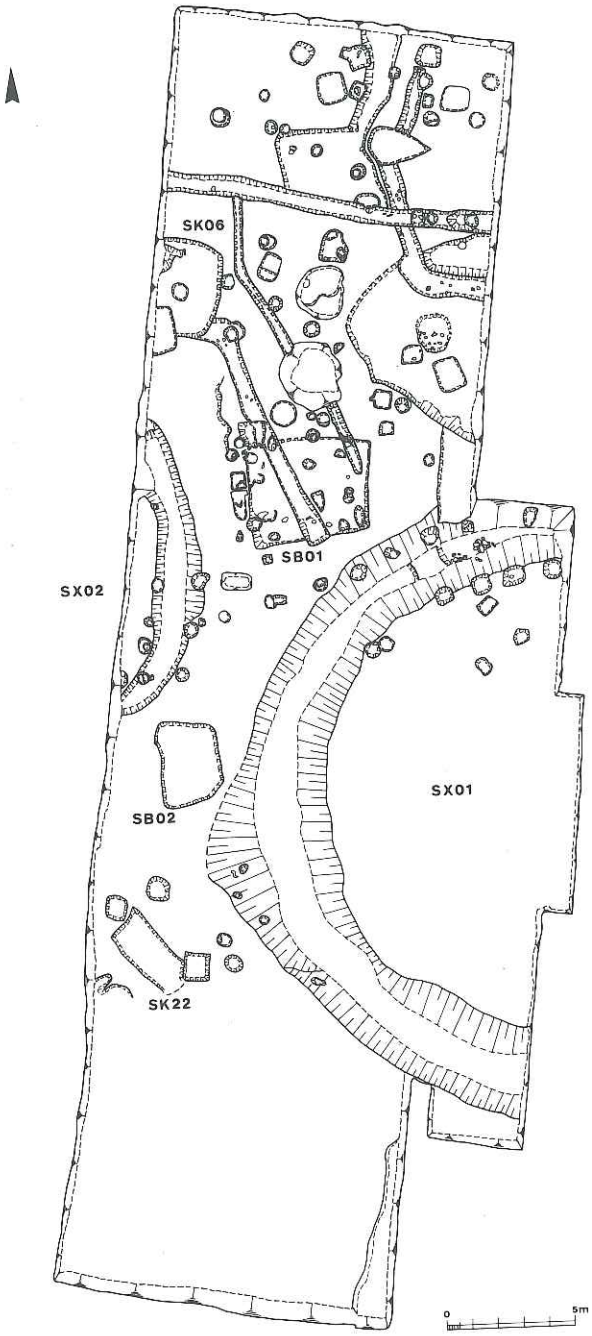
Ｂ．第１次調査の概要

大久保町山ノ内にある宇治市営旦椋団地が、建物の老朽化にともなって建て替えられることとなった。ここは遺跡地図によれば大久保環濠集落遺跡の範囲に入っており、平成３年度事前の発掘調査が行われた。

調査の結果、当初予想されていた中世の遺構はわずかに溝１条しかなく、６世紀後半から８世紀に至る古墳、及び集落遺跡であることが判明した。６世紀後半の遺構としては、円墳１基、方墳１基、土壙墓がある。円墳は直径約20mで、すでに埋葬施設を削平されていたが木棺直葬系と考えられる。周溝内からは多量の土器や鉄鏃が出土し、豊富な副葬品の存在が予想された。

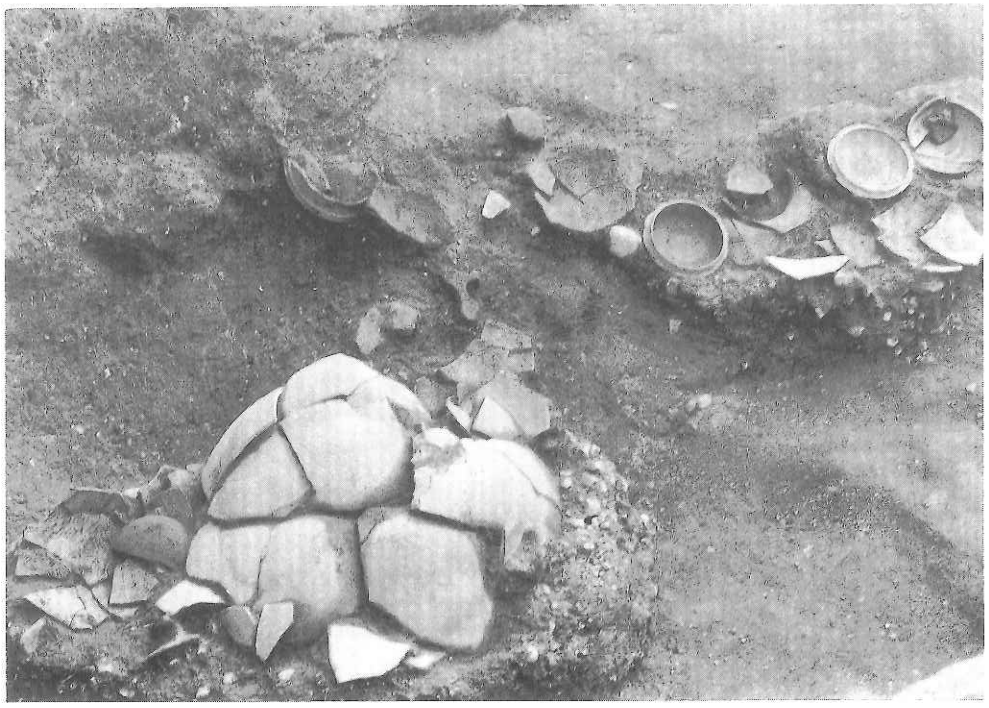
飛鳥から奈良時代の集落では、竪穴式住居・掘立柱建物・土壙・溝などを検出している。集落部分では、遺構の切り合いが多く不明な部分も多いが、ここでも土器の出土量が多く、大規模な集落であることが考えられた。

この調査の中で特に注目されたのは、削平された古墳の肩から飛鳥時代の土器が出土していることや、埋没した周溝の部分から移動式竈を使用した痕跡を検出したことである。この事は、古墳築造からわずか50年前後で古墳が破壊されたことを示唆しており、集落の場所を選定する際に何らかの規制が働いた可能性が考えられた。７世紀といえば久世郡に栗隈大溝が掘削された頃であり、こうした大規模な開発との関連も含めて、旦椋遺跡が重要な遺跡であることが認識された。



第３図　第１次調査地平面図

第４図　第１次調査地全景（南から）

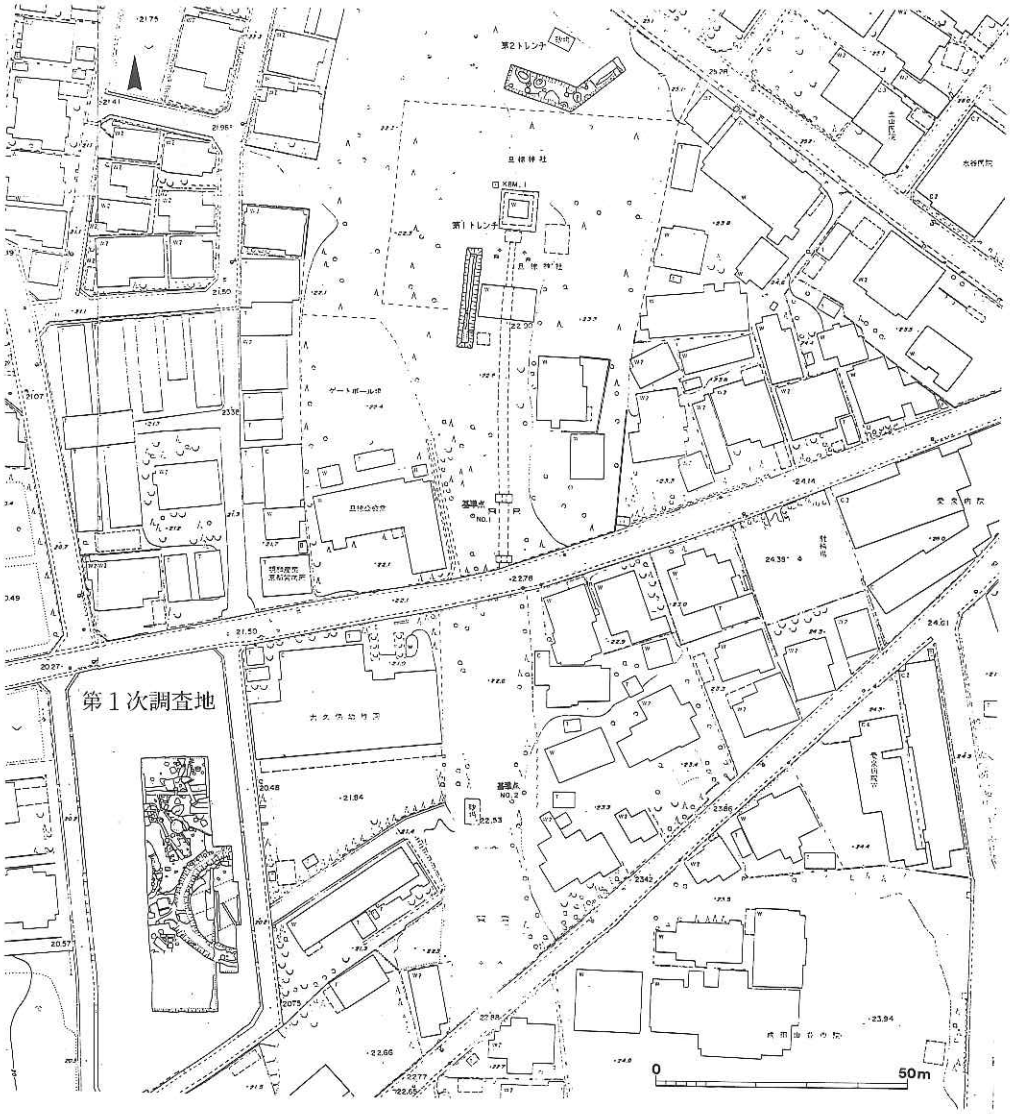


第５図　SX01周溝内遺物出土状況（北から）

3．遺　　構

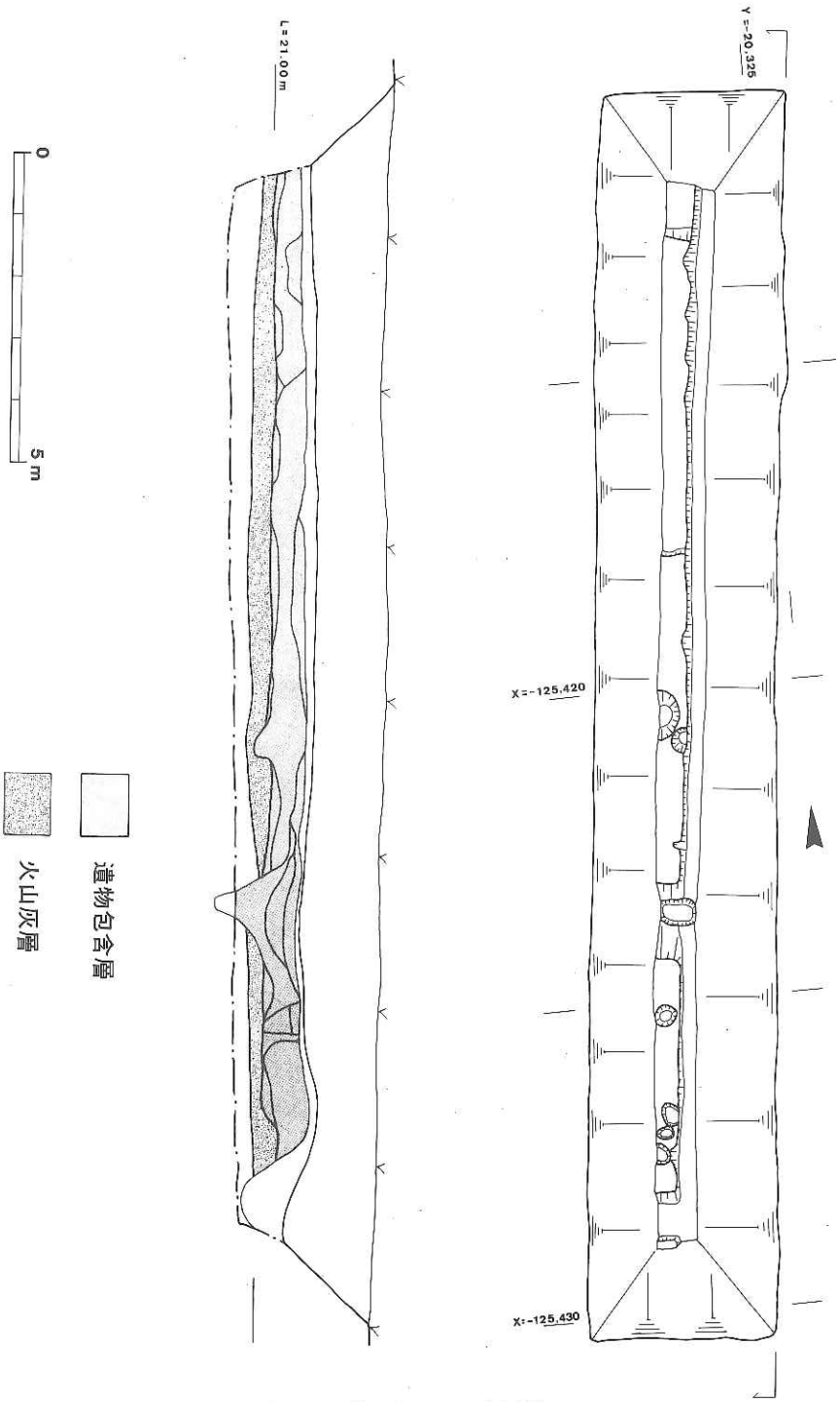
A．第１トレンチ

第１トレンチは、旦椋神社本殿西側に設定したトレンチで、規模は３ｍ×20ｍである。第１次調査のトレンチから僅かに 100 ｍの地点であり、また現状では地形的な変化も認められなかったため、第１次調査と同様に表土直下に遺構面が存在するものと思われた。

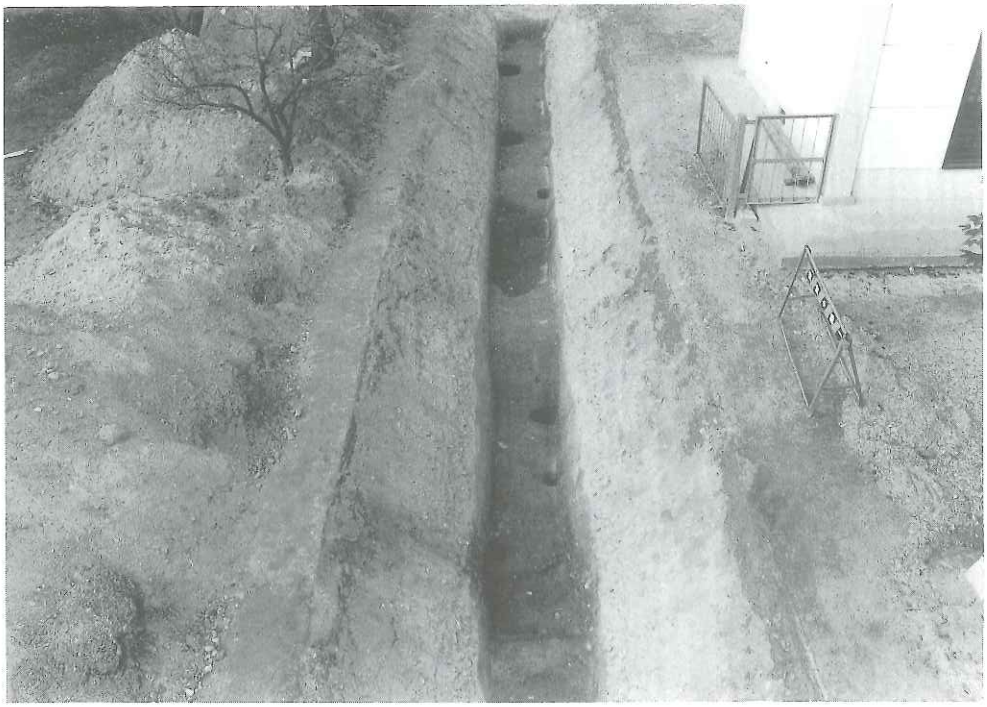


第６図　トレンチ配置図

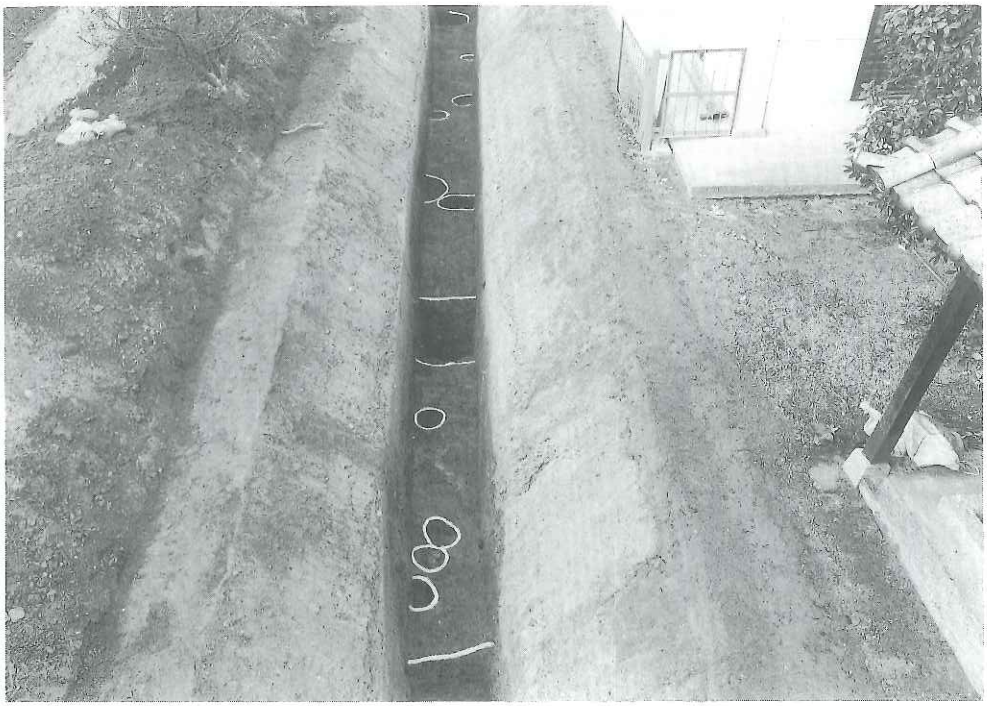
3．遺　　構



第７図　第１トレンチ実測図

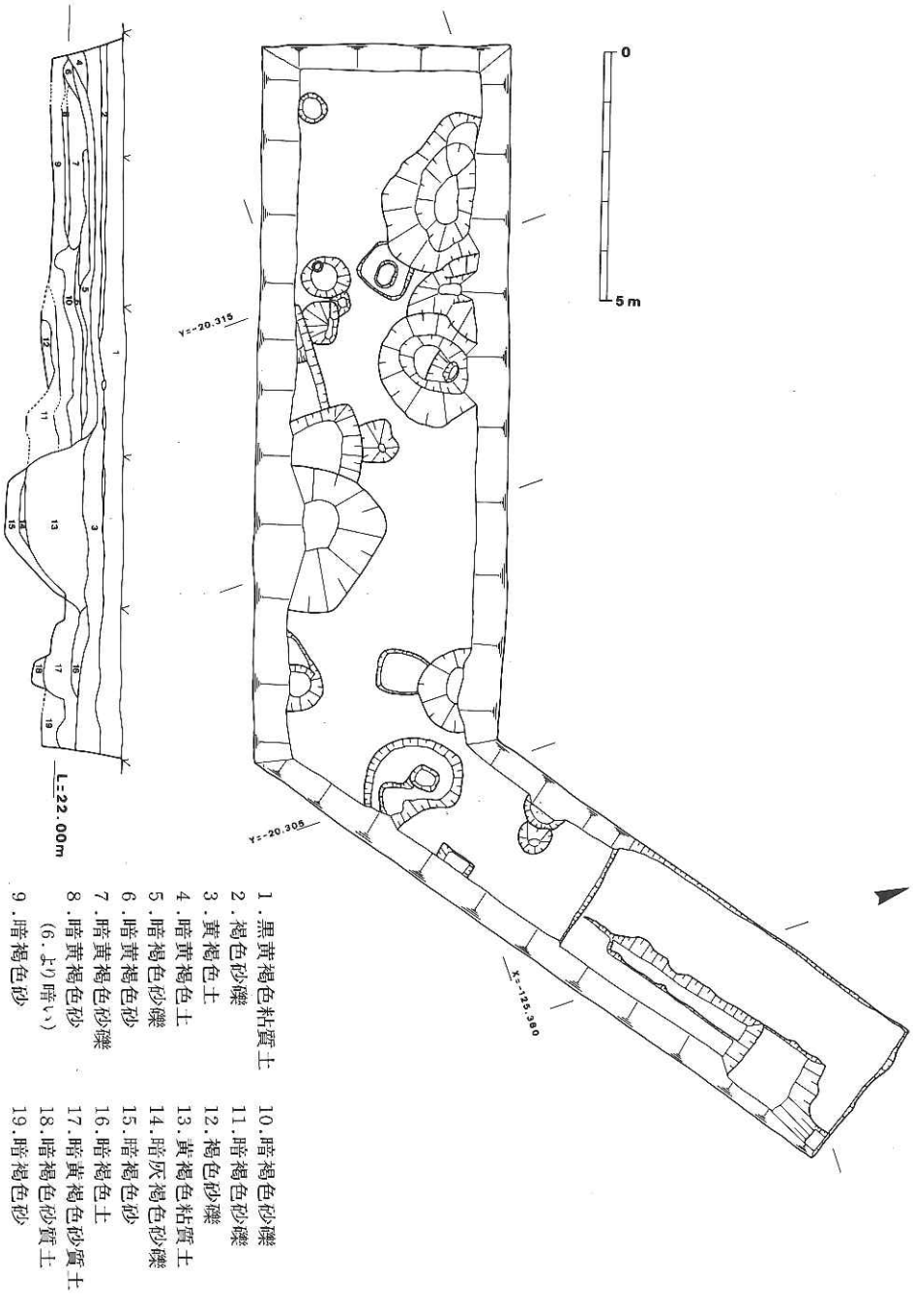


第８図　第１トレンチ上層全景（南から）



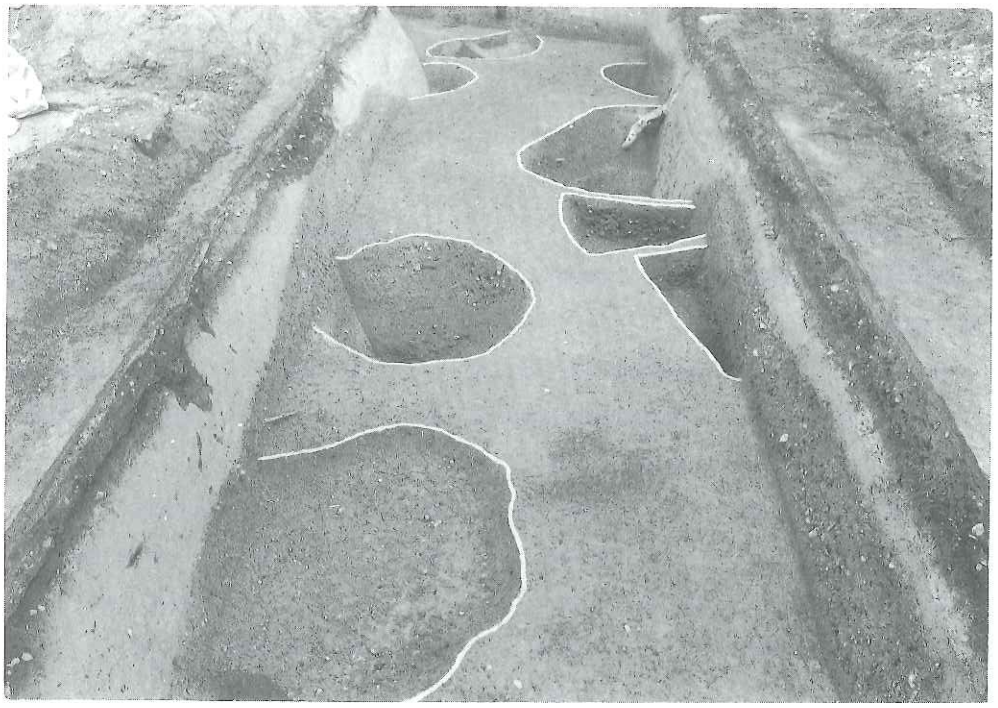
第９図　第１トレンチ下層全景（南から）

3．遺　　構



第10図　第２トレンチ実測図

第11図　第２トレンチ上層全景（西から）



第12図　第２トレンチ下層全景（西から）

3．遺　構

掘削の結果、表土の直下から約1.5mの厚さで河川氾濫の堆積による砂層を検出し、遺物包含層はさらにその下層にあることが判明した。遺物包含層は主に茶褐色土系で、概ね3層に分けられる。含まれる遺物は古墳時代から中世に至るもので、ことに中世のものが多い。とくに砂層直下の層では、トレンチのほぼ全面にわたって土師器の皿の細片が散っており、神社に関連する面であることが考えられた。

包含層の下層には黒褐色の粘質土層があり、層中には火山ガラスが含まれていた。特にトレンチ南端では良好な状態で火山灰層が見られるが、層の関係から見て2次堆積の可能性が高い。

遺構は、包含層の各面で土壙・小規模なピット・溝を検出しているが、調査面積が狭く性格の特定できる遺構はない。

B．第2トレンチ

第2トレンチは、旦椋神社本殿の北側に設定したトレンチで、面積は105㎡である。この地点は、神社から北に向かって緩やかに高くなっており、神社の背後に南西から北東に向かう丘陵があるものと思われた。そして『大久保村村誌』では旦椋神社の背後に「別所墓」と呼ばれる陵墓があったことが書かれていること、また地元でも神社背後にある高まりが古墳であるという伝承があることなどから、これまで存在の知られていなかった古墳があることが予想された。

調査はまず古墳か否かを確認するため、斜面にトレンチを設定し掘削を行った。掘削の結果、この高まりがすべて黄褐色の砂質土の堆積であることが分かり、大谷川の氾濫によると思われる堆積物であることが判明した。そしてこの黄褐色砂質土の下層に、第1トレンチとほぼ同様の遺物包含層があることが判明した。このため、高まりの下の地点を拡張し、包含層の調査を行うこととした。

層位は第1トレンチとほぼ同様であるが、第1トレンチで見たような土師器の出土状況はなく、むしろ古墳時代から奈良時代の遺物の出土が多い。またトレンチ西側では、付近に小規模な河川があるためか、層的な乱れを生じている。

遺構は、包含層上層では上層の黄褐色砂質土を埋土とする土壙や茶褐色砂質土を埋土とするピットを検出している。また下層でも方形の土壙・ピットを検出しているが、今回のトレンチの中ではいずれも性格を特定するには至らなかった。しかし遺物は遺構に伴うものは少ないが、大きく磨滅を受けているものは少なく、付近に何らかの遺構があるか、もしくは造成などにより人為的に運ばれてきた可能性が考えられる。

4．遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ約５箱分で、その多くが包含層中からの出土である。遺構内から出土した遺物もあるが、数時期にわたる遺構の性格や明確な時期を示すものではない。遺物は破片ばかりで、完形に復元し得るものはごくわずかであるが、磨滅が少なくまた破片も大きいことから別の遺跡から流されてきたとは考えがたい。

時期は主に古墳時代から中世に至る。古墳時代から奈良時代の遺物は、第１次調査の遺物の内容と類似するが、第１次調査では出土していない平安時代から中世の遺物もあることが注意される。また小片ではあるが、弥生時代後期と考えられる甕の底部が１点のみ出土している。

第13図１～６は、主に古墳時代から奈良時代の遺物である。１は小型の甕で、器壁の内外面ともハケを施さず、ナデによって調整している。古墳時代後期もしくは飛鳥時代のものと思われる。２は土師器の甕で、外面は粗いハケを施す。３は杯Ｂの蓋である。口縁内面のかえりが退化しておらず、７世紀前半と考えられる。６は皿Ａである。外面は遺存状態が悪く、調整は明確ではないが、ヘラミガキを施している可能性が高い。底面はヘラケズリを施す。内面はラセン文と二段放射暗文を施す。平城宮Ｉもしくは II の段階と思われる。

７・８は灰釉陶器である。７は椀の口縁、８は皿の底部である。底部には輪状高台を有する。平安時代前期のものと思われる。

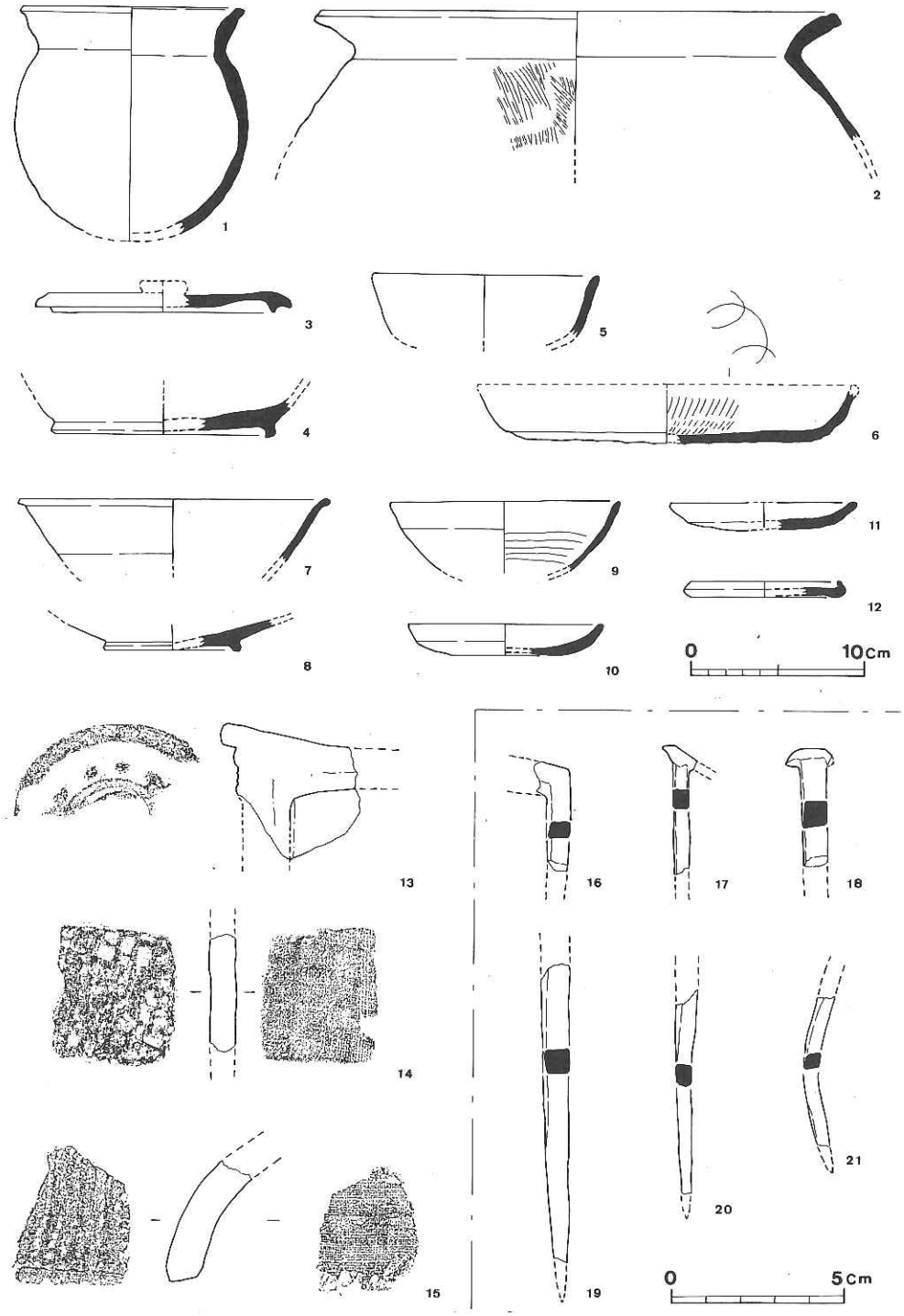
９は瓦器椀である。内面には粗に暗文を施し、外面は口縁端部をヨコナデするほかは不調整である。鎌倉時代のものである。

10～12は土師器の皿である。10は褐色系の胎土を持ち、口縁は１度だけナデを施す。11は灰白色系の胎土を持ち、口縁端部に強いナデを施し段を作っている。内面は、口縁はヨコナデ、底部はナデを施す。12は口縁部を内側に屈曲させたもので、胎土は褐色系である。土師器の皿は細片が多く図示し得るものが少ないが、平安京などではあまり見られない形態の土器も含まれている。時期は、鎌倉時代から室町時代に至るものと考えられる。

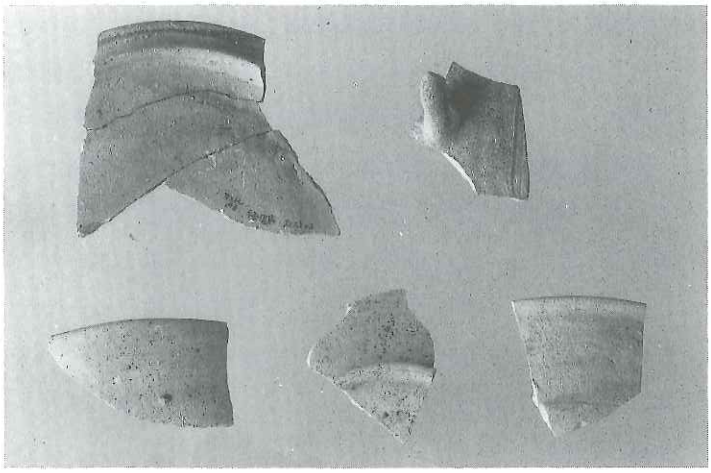
13～15は瓦類である。13は軒丸瓦で、外区に連珠文、内区は三巴文であろう。時期は中世と考えられる。14は平瓦、15は丸瓦で、いずれも凹面は布目を残し、凸面は格子叩きを施す。15は格子叩きのあとそれをナデ消している。白鳳時代のものであろう。

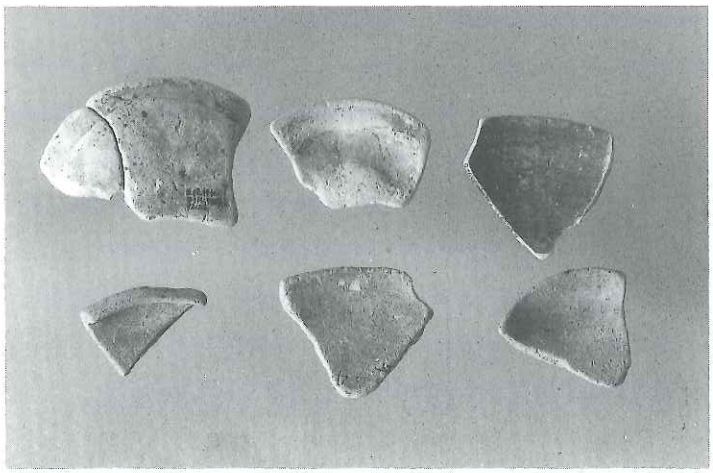
16～21は鉄釘である。いずれも断面方形を呈する。釘の頭は、叩いて先端を潰して作り出している。大きさは大型と小型の２種類がある。このほかに鉄製品としては鉄滓が出土している。

4．遺　　物



第13図　遺物実測図





第14図
出土遺物

5．ま と め

今回の調査では、当初予想していた古墳時代・奈良時代の遺構は検出しなかったが、第１次調査ではほとんど確認していなかった中世の遺構を検出した。これらは調査面積が小さかったため、性格を明らかにできるものは少ないが、現在の旦椋神社の前身と考えられる神社に関連する層を確認できた。現在の旦椋神社の社殿は江戸時代前期のものと考えられているが、その棟札から当初の建物は永禄９年（1566）に造営されたことがわかっている。このことは京都吉田神社の神官吉田兼右の日記『兼右卿記』にも見え、20年来断絶していた「天神社」の新社を造立したことが記されている。この記事から『宇治市史』では、現在の旦椋神社の地にはもともと天神社があり、永禄９年の天神社の新造を契機として旦椋神社も合祀したものと推測している。今回の調査成果はこの推測を裏付けるもので、洪水層の下層から出土している土器は13世紀から16世紀のものである。さらに、今回の調査によって天神社が鎌倉時代に成立していること、神社の廃絶は洪水によることが明らかになった。

さて、第１次調査で検出した飛鳥から奈良時代の集落の範囲であるが、今回の調査地までは及んでいない可能性が高い。調査地付近の本来の地形は、第１次調査地を最高所とする丘陵の北側斜面にあたり、土地利用には適さなかったものと思われる。土地利用が行われるようになるのは、おそらく神社の造営からで、層中に包含される中世以前の遺物は、この造営にともない遺跡地の土を造成した可能性が考えられる。なお、今回の調査で出土した遺物の中に白鳳時代に遡る瓦が含まれていることは、付近に集落だけでなく寺院もあった可能性があり、注意される。

宇治市西部の旧久世郡域は、現在遺跡の分布や内容が把握しにくい状況にある。これはこの地域の開発が早い段階から行われたこともあるが、河川の付け替えによる地形の変更がたびたび行われてきたことも大きな要因である。この事は、この地域の人々にとって、大量の土砂を押し出す河川の制御がいかに重要なことであったかを物語るものであり、『日本書紀』に見える栗隈大溝掘削の記事は、そのさきがけとなるものであったと思われる。しかし、栗隈大溝掘削の記事が仁徳記と推古記の２度に渡って記載されていることから判断すれば、再三に渡る付け替え工事を必要としたのであろう。この地域の集落は、おそらくその度ごとに移動を繰り返したものと思われる。こうした集落の移動を追うことによって、栗隈大溝をはじめとする平野の開発の実態が明らかになるものと思われる。

『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』
第 20 集

発行日　平成5年3月31日
発　行　宇治市教育委員会
〒611 京都府宇治市宇治琵琶33番地
印　刷　有限会社 新進堂印刷所